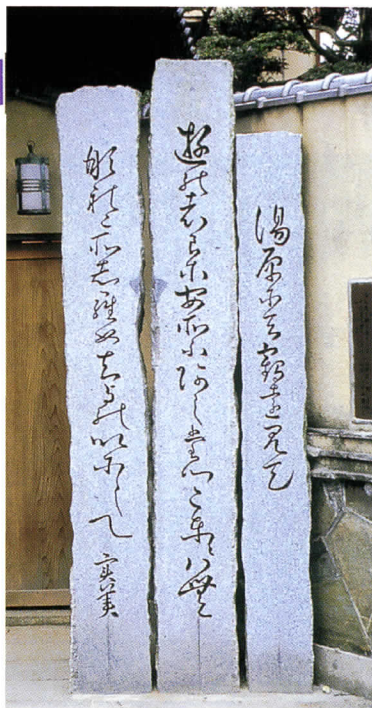


五 卿 の 歌 碑



▲魚源旅館の前にある三条西季知の歌碑



▲大丸別荘の裏門前にある三条実美の歌碑

明治維新は、^{そのうじょうい}尊皇攘夷派公家の^{はく け}太宰府入り
 が大きなきっかけとなりました。^{さんじょうきねとみ}三条実美・
^{さんじょうにしすえとも}三条西季知・^{ひがしく}東久世通禧・^{ぜみちとみ}壬生基修・^み四条隆
^{うた}誦の5人（五卿）です。彼らは、藩閥政治を
 廃して王政復古をめざした勤皇派の士族たち
 と組み、永年の圧制に反発する農民などの世
 直し運動とも結び、さらに西欧列強諸国の開
 国要請という社会情勢を背景に19世紀末の政
 治改革を実現させました。

慶応元年(1865)2月、^{ちやうしやう}長州藩から筑前黒田
 藩が支配する太宰府天満宮延寿王院に移され
 た五卿は、ここで薩摩の西郷隆盛や土佐の坂
 本龍馬、筑前の月形洗蔵、平野国臣など勤皇
 志士たちと新しい政治をめざし秘策を練りま
 した。これに対し、幕府側は目付役の小林甚
 六郎らを派遣して五卿の京都帰還を図ったた
 め、勤皇派との間で緊迫した関係が続きました。
 月形洗蔵は、市内古賀に幽閉された後、
^{いつちやう}乙丑の獄で刑死するなど動乱の時代だったの
 です。時に、洗蔵38歳でした。

「ゆのはらに あそぶあしたづ こととはむ
 なれこそしらめ ちよのいにしへ」

二日市温泉の大丸別荘旧玄関に建つ歌碑に

刻まれているのが、三条実美の一首です。

「湯の原を群れ遊ぶ鶴に聞いてみたい。おま
 えたちなら知っているだろう、はるか古代の
 御世を、とかつての律令制と王政復古を重ねて、
 これから来るであろう新しい時代への激しい
 思いがあらわれています。実美は維新のリー
 ダーとして新政府の太政大臣も務めました。

武蔵寺の山門横にある東久世通禧の一首。
 「藤なみの はなになれつつ みやびとの
 むかしのいろに そでをそめけり」

通禧は新政府で外交を担当し、元老院議員
 も務めました。竹亭の雅号で歌人としても知
 られています。

当時、武蔵で五卿の世話をした温泉奉行の
 松尾家の近くに三条西季知の歌碑があります。

「けふここに ゆあみをすれば むらぎもの
 こころのあかも のこらざりけり」

季知は新政府の参与となり、明治天皇の侍
 従として和歌の指導にあたりました。

壬生基修の歌碑は、武蔵寺近くに建ってい
 ます。

「ゆうまぐれ しろきはゆきか それならで
 つきのすみかの かきのうのはな」



▲古賀にある月形洗蔵幽閑の碑。

◀武蔵寺の山門前にある
東久世通禧の歌碑。
右は、同寺下にある
壬生基修の歌碑。

「薄暮卯花」と題した叙情的な和歌です。基修は新政府の参与の後、元老院議員、貴族院議員も務めました。

こうした和歌と異なる漢詩碑が、天拝山歴史自然公園の池上池のほとりにあります。

「青山白水映紅楓」「樂夫天命復何疑」

四条隆謨の作。隆謨は五卿のうち唯一の軍人で戊辰戦争に錦旗奉行として参加し、のち大坂、仙台など鎮台司令官を歴任しています。

こうした公家たちは、慶応3年末の大政奉還が実現するまでの3年余に、太宰府周辺の勤皇派の庄屋、造酒屋などを訪れ、得意の和歌を詠みました。

実美は山家宿の山田勘右衛門宅に「洗心亭」の額を贈り、そこで一首を残しています。

「こころさへ あらはれてこそ すずしけれ
のきばのかぜに にわのましみつ」。

また、阿志岐の平山仙十郎宅でも一首。

「くれたけの しげみのやどは なかなか
よのうきふしも なきところなり」。

大石の医師岡部忠徳宅で治療を受けたなかで、

「いかにして つくしのうみに よるなみの
ちへのひとへも きみにこたへむ」。

いずれも「七卿在西日誌」や「回天実記」などに記録されており、五卿の麗筆は今日まで大切に伝えられています。

松尾光淑氏が著した『武蔵温泉誌』（明治31年刊）には、「実に王政維新の原動力は此地に在りしなり」と記されています。

(村里徳夫)

▼天拝山歴史自然公園の池上池のほとりに
建つ四条隆謨の漢詩碑。

